

COLLECTION EXHIBITION

Special Feature : Masayuki Imai, Bauhaus, Tadayoshi Irino, and a New Collection.



今井政之《龜田形茶室磁器大皿》1965年

冬の  
所蔵  
作品  
展

# 小特集 今井政之

バウハウス・入野忠芳・新収蔵作品紹介

2020年1月2日(木)～4月19日(日) 2階展示室

[開館時間] 9:00～17:00 (3月31日までの金曜日は19:00、4月1日以後の金曜日は20:00まで開館) ※入場は開館の30分前まで

[休館日] 月曜日 ※特別展会期中及び祝日・振替休日の月曜日を除く ※2月25日は、展示替のため所蔵作品展は閉室

[入館料] 一般510(410)円 / 大学生310(250)円 ※ ( )内は20名以上の団体

[縮景園共通券] 一般610円 / 大学生350円 ※特別展は別料金

※当館で開催中の特別展入館券にて無料でご覧いただけます。

※高校生以下、障害者手帳をお持ちの方や65才以上の方、県内の大学に在学する留学生の方などは無料(1階総合受付でお申し出ください)。



広島県立美術館  
Hiroshima Prefectural Art Museum

<http://www.hpam.jp/>

〒730-0015 広島市中区上本町2-2-1 TEL:082-221-8266 FAX:082-225-1401

### 【概要】

### 冬の所蔵作品展

### 【小特集】今井政之・バウハウス・入野忠芳・新収蔵作品

1968(昭和43)年に開館した広島県立美術館は、1996(平成8)年に現在の建物に生まれ変わり、昨年は開館50周年の節目を迎えることができました。

開館以来、多くの方々のご協力を得て、コレクションを充実させてまいりました。収集重点方針として「広島県ゆかりの美術」「1920～30年代の美術」「日本およびアジアの工芸」を掲げ、現在は総数5,000点を超えています。

今期の所蔵作品展では、3つの小特集と昨年度の新収蔵作品をお楽しみいただきます。小特集では、昨年度に陶芸家として広島県初の文化勲章に輝いた今井政之、2019年に開校100周年を迎え現在に至るまで様々な分野に影響を及ぼした造形学校のバウハウス、生誕80年を迎えるとともに昨年度秋に実施した所蔵作品人気投票で日本洋画の部で第1位の支持を得た入野忠芳といった作家やテーマをご覧ください。また、昨年度に新たに収蔵した絵画や工芸作品のお披露目展示、さらに、女流日本画家に着目した展示室もお楽しみください。号数を重ねるにつれてファンが増してきた所蔵作品ミニガイド3種も登場しています。

来館するごとに新しい美の魅力を発見し、心とんでいただける展示をめざし、今後も努力を重ねていくことで、美術館を支えてくださる皆さま方への感謝の気持ちを表してまいります。新しい年の所蔵作品展にもご期待ください。

### 【彫刻展示室】小特集 今井政之

この展示室では広島県竹原市の豊山窯で作陶する陶芸家、今井政之の仕事をご紹介します。

今井政之は昭和5(1930)年に大阪市に生まれ、昭和18(1943)年から父の故郷である広島県竹原市に疎開しました。広島県立竹原工業学校金属工業科に入学し、翌年には戦時勤労学徒動員生として三井金属鉱業竹原製煉所へ配属。卒業後、岡山県の備前で京都とゆかりの深い師や先輩に囲まれて作陶の基本を学ぶとともに、岡山県工業試験場窯業分室で釉薬や陶土を研究しました。昭和27(1952)年には憧れの京都へ赴き、初代勝尾青龍洞の内弟子、そして、京都青陶会の創立モダニズムの風は若い陶芸家にとって創作の糧となり、前衛的な作品が続々と作られました。昭和28(1953)年に第9回日展に初出品、初入選の快挙を果たして以降、受賞を重ね、着実に評価を高めていきます。そして一昨年11月、陶芸家として広島県から初めてとなる文化勲章を受章しました。

追い求めてきたのは、陶芸の原点である土、そして、土そのものの味を最大限に表現することであったと作者自身が回想しています。自然豊かな竹原の海こそ、作者の原風景なのです。陶芸を志した頃から今日に至るまで、新しい世界を求める姿勢は変わらず、未知の表現への挑戦はこれからも続くことでしょう。



今井政之《チャンカイ大皿》1991年 陶器 広島県蔵

## 【第1展示室】小特集 バウハウス—芸術と技術の統一

当館では、1920～30年代(両大戦間)の美術作品を重点的に収集しています。この時期、ヨーロッパ諸国では第一次世界大戦の反動から、革新的な考え方が多く生まれました。大戦の終局間もない1919年には、造形学校バウハウスがドイツのヴァイマールで開校します。粗悪品の大量生産を危惧する同時代の思潮を受け、機械化による合理性と芸術性を共存させるべく、先進的な教育システムの確立を目指しました。

バウハウスの初代校長を務めた建築家、ヴァルター・グロピウスはバウハウス宣言書に、「すべての造形活動の最終目標は建築である。」と謳いました。彼は、広く芸術を通じたユートピアの建設を志し、頭角を現していた芸術家たち——ライオネル・ファイニンガーやワシリー・カンディンスキー、パウル・クレーらが教員(マイスター)として招聘されます。

国際的に活躍する教員たちのもと、国籍・年齢・性別にかかわらず入学を許された生徒たちは、多様な活動に励みました。ナチス政権の台頭に伴い、その活動は終焉を迎えますが、バウハウスが残した大きな足跡は、今日のデザインや建築をはじめ、美術のさまざまな分野に色濃く残されています。

この展示室では、バウハウスの版画工房で制作された『新ヨーロッパ版画集』(第1集、第4集)に加え、教員として活躍した画家たちの作品、当時の様子を示す関連資料などを通じて、その活動をご紹介します。



ライオネル・ファイニンガー《バウハウス宣言書表紙》  
1919年 木版・紙

## 【第2展示室】小特集 入野忠芳

この展示室では、今年度最後の特集展示として、生誕80年を迎えた入野忠芳(1939 - 2013)の作品をご紹介します。

広島市に生まれた作者は、中学時代から油絵の制作を始め、現在の武蔵野美術大学に学びました。卒業後に帰郷し、戦後の広島画壇を代表する作家のひとりとして活躍。芸術の社会的意味を大切にしながら、生と死の連環を想起させる作品を生み出しています。

画業の原点となったのは、8月6日の実体験。少年期の作者が見たこの世の終末は、忘れられない記憶として刻まれ、創作活動の基軸をなす「崩壊感覚」をもたらしました。

このたびの特集では、当館が所蔵する9作品により、初期から晩年までの画風の変遷をたどります。あわせて、戦争体験を再現的に描いた唯一の作といつてよい、絵本『もえたじゃがいも』の原画を特別展示。作者の原風景を知ることで、生と死が交錯する「崩壊と生成のせめぎ」という独自の主題が生まれた背景を実感していただけのことと思います。

広島画家として生き、生命のありようを見つめた創作の軌跡を、小林千古、南薫造、鬨光、菅井汲ら常設4作家の作品とともにご覧ください。



入野忠芳《裂罅(れっか)75-6》1975年  
油彩・画布

## 【第3展示室】新収蔵品紹介

この展示室では、昨年度、新たにご寄贈、ご寄託いただいた日本画と日本洋画、工芸の作品を中心にをご紹介します。

まず日本画に属するものとして、山野峻峯齊・旭峯齊関係の作品と資料、また小林和作の作品があります。山野峻峯齊は広島藩の御用絵師、旭峯齊はその子で、同じく広島藩に絵師として仕えたことがわかっています。ゆかり作家の佳品というだけでなく、幕末の絵師の活動を知る上でも大事な作品と資料です。小林和作は晩年に尾道に過ごした洋画家として有名ですが、京都絵画専門学校で日本画を学び、院展出品作で褒状を受けたほどの実力でしたが、間もなく洋画に転進したため、日本画作品はあまり残っておらず、今回ご紹介する作品は和作の画業を考えるうえで重要なものといえるでしょう。

日本洋画からは、小林和作、若山為三に加え、朝井清の作品をご紹介します。朝井清は呉市出身で、呉海軍工廠で働きながら独学で技術を磨き、棟方志功らと日版会を結成するなど、戦前・戦後を通じて日本の版画界を牽引しました。小林和作は、日本画でもご紹介しましたが、晩年は尾道を拠点として四季折々にスケッチ旅行を重ね、自然から読み取った美を画面に描き出そうと努力を続けました。

工芸では、日本伝統工芸展でもおなじみの粟根昭二郎や木村芳郎、そして芸術院会員で日展を舞台に活躍を続ける奥田小由女の大作をご紹介します。

この初お披露目が、作品と皆さまとの素敵な出会いになれば幸いです。



朝井清《広島の夕焼(サインあり)》  
1945年 リノカット・紙

## 【第4展示室】日本画壇における女性の活躍

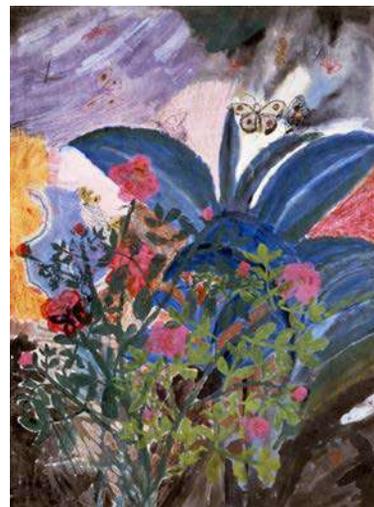
### —伊万里磁器と日本画分野の名品とあわせて

第4展示室では、伊万里色絵磁器と、近現代日本画壇の大家である児玉希望、奥田元宋、平山郁夫の名品を中心としつつ、同時期の画壇で活躍した広島県出身の女性画家4人にもスポットを当てます。

戦後、美術界での活躍を目指した女性画家は少なくありませんが、その画壇における地位の獲得には、1946(昭和21)年に設立された女流画家協会の趣旨に「女流画家の団結により芸術的向上を図り、また新人の登竜門としての意味を以て展覧会を計画す」とあることによって、男性画家とは異なる状況にあったことが伺い知れます。この団体で活躍した広島県出身の女性画家の代表格として挙げられるのが丸木スマ(1875 - 1956)です。戦後、70歳を過ぎて動植物や山・川などの自然を描くことを始めたスマの作品は、ほどなくして画家である息子夫婦(位里・俊)にすすめられて出品した女流画家展や院展(日本美術院)で入選を重ねることになりました。

また、絵を描いて生きることを若くして志し、晩年まで院展で活躍を続けた女性画家もいます。益井三重子(1910 - 2010)と神田三千枝(1924 - 1992)は安田鞞彦の門下に、水谷愛子(1924 - 2005)は前田青邨の門下に学びました。三重子、三千枝、愛子の3人は、それぞれの追い求める女性像を描き、同時代の院展に入選を重ねました。

希望、元宋、平山らと合わせて、近現代女性画家らによる造形の大胆さ、繊細さをご覧ください。



丸木スマ《蝶》1953年 紙本彩色

## 【関連イベント】

### ①スペシャルトーク

小特集に合わせ、今井政之氏(陶芸家／文化勲章受章者)によるスペシャルトークを行います。

日時:3月7日(土) 13:00～(1時間程度) [開場12:30]

場所:地階講堂(先着200名)

※ 事前申込不要 ※聴講無料

### ②「小特集 入野忠芳」ギャラリートーク

日時:2月23日(日) 15:00～

講師:藤崎綾(当館主任学芸員)

場所:2階 第2展示室

※事前申込不要、要入館券。2階第2展示室入り口でお待ちください。

### ③美術講座

「バウハウス100年の足跡—ワイマールから Dessau へ—」

日時:2月28日(金) 15:00～(1時間程度) [開場14:30]

講師:山下寿水(当館学芸員)

場所:地階講堂(先着200名)

※事前申込不要 ※聴講無料

### ④対話型鑑賞

学芸員が選んだいくつかの作品をみんなでお話しながら鑑賞します。それぞれが発見したこと、感じたことなどを共有しながらみることで、各作品をよりじっくりと楽しんでいただくプログラムです。

(※本プログラムにご参加の方は、なるべく事前に作品解説を読まれないことをおすすめします。既にお読みになった方でも、ご参加は可能です。)

日時:1月25日(土)・3月14日(土) 各日 15:00～(1時間程度)

ナビゲーター:当館学芸員

場所:2階 展示室

※ 申込不要、要入館券。2階会場入り口でお待ちください。

### ⑤ 友の会ボランティアガイド

当館友の会ボランティアガイドが所蔵作品展についてわかりやすく解説します。

日時: 平日14:00～／土日祝11:00～、14:00～(1時間程度)

※なお、3月7日14:00～、1月2日～1月4日はお休み

場所: 2階 展示室

参加料: 無料

※要入館券(高校生以下無料)、申込不要

### 【ミニガイドの無料配布】

「広島県立美術館 所蔵作品ミニガイド⑨今井政之ー瀬戸内を原風景にー」

「広島県立美術館 所蔵作品ミニガイド⑩バウハウスー芸術と技術の統一ー」

「広島県立美術館 所蔵作品ミニガイド⑪入野忠芳ー崩壊と生成を見つめてー」

広島県立美術館 所蔵作品ミニガイド⑨～⑪を、来館者に無料配布します。(在庫限り)

### 【媒体掲載用の画像提供について】

※いかなる場合も本プレスリリースからの転用はご遠慮ください。

※都合により出品作品が異なる場合がございます。ご了承ください。

※画像については提供が可能です。ご掲載の際に画像がご入り用の場合は、当館までお問い合わせください。

※画像掲載の際には、画像とテキストが掲載されたレイアウト原稿を事前に当館までご提出いただき、1週間程度お時間を頂戴いたします。ご了承ください。

#### 問い合わせ先

広島県立美術館

〒730-0014 広島市中区上幟町2-22

TEL.082-221-6246 FAX.082-223-1444

E-mail iroeuma2@gmail.com

担当 学芸課 神内 有理

総務課 広報担当 一色 直香、弘津 かおる